13. 米国防総省の中国軍事力報告書2022

ガイド Guide

2020年の同報告書は、当時の中国の核弾頭保有数を200発代前半とし、今後10年間で400発以上保有すると見積もっていた。これに対し、2022年の報告書は、すでに400発を越えたと推定される核弾頭は2035年には1500発に達すると見積もった。この見積もりについて、中国はただの推測に過ぎないと批判した。以下では、同報告書のうち核戦力に関する部分を訳出する。

中華人民共和国に関わる軍事および安全保障上の展開2022（抜粋）

2022年11月29日

核戦力

主な重要項目

・今後10年間、中国は核戦力の近代化、多様化、増強を目指している。10年前の人民解放軍の核近代化努力と比較すると、現在の努力は規模、複雑さともに過去の試みを凌駕している。

・中国は、陸上、海洋、空中配備の核兵器運搬プラットフォームに資金を投じ、その数を増やしており、この核戦力の大幅な増強を支えるために必要なインフラを構築している。中国はまた、高速増殖炉と再処理施設を建設してプルトニウムの生産・分離能力を高めることで、この増強を支えている。

・2021年、中国政府はおそらく核軍拡のペースを速めた。国防総省は、中国が運用中の核弾頭の備蓄量が400発を超えたと見積もっている。

・中国人民解放軍は、2035年までに国防と軍隊の「近代化を基本的に完了」させる計画である。中国がこのままのペースで核兵器の増強を進めれば、2035年には約1500発の核弾頭を保有する可能性が高い。

・中国はDF-41という中国初のMIRV能力を持つ道路移動式サイロ配備の大陸間弾道ミサイル（ICBM）の配備を進めている。このシステムは、ミサイル1基あたり3個以下の核弾頭を搭載することを意図していると思われ、DF-31クラスのICBMよりも射程と精度が改良されている。中国は、JL-2またはJL-3 潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）を最大12基搭載できるJIN級（094型）潜水艦発射弾道ミサイル搭載原子力潜水艦（SSBN）6隻による海洋抑止パトロールを継続的に行っている。

・中国は、サイロ配備型固体燃料式ミサイル基地の建設を急ピッチで進めている。サイロは、合計300以上になる可能性が高く、DF-31およびDF-41クラスのICBMを配備することができる。このプロジェクトおよび中国がサイロ配備の液体燃料式ミサイル戦力を増強していることは、中国が警報即発射（LOW）態勢に移行することによって、その核戦力の平時の即応性を高めようと意図していることを示唆している。

戦略。中国の核兵器使用のアプローチは、人民解放軍による敵の第一撃の「抑止」と抑止が失敗した場合の「反撃」に基づいており、敵の軍事力、人口、経済に対して報復すると脅すことにある。（略）

・核戦力に対する中国の現在のアプローチには、「先行不使用」（ノー・ファースト・ユース）政策の公式の宣言が含まれる。その政策は、中国はいかなる時も、いかなる状況においても、核兵器を先に使用しないというものである。加えて中国は、いかなる非核兵器国に対しても、また非核兵器地帯において、無条件で核兵器の使用または使用の威嚇を行なわない。この政策にもかかわらず、中国の核戦略には、中国の核戦力または指揮統制の存続を脅かす非核攻撃、あるいは、核攻撃の戦略的効果に近い非核攻撃に対して、核攻撃の実施を検討することがおそらく含まれている。また、中国政府は、通常兵器による戦闘での敗北が中国の生存を著しく脅かす場合、抑止力を回復するために核兵器を使用することをおそらく検討するであろう。

即応態勢。発射台、ミサイル、弾頭に分離することによって、中国はほぼ確実に核戦力の大部分で平時の状態を保っている一方、核兵器と通常兵器を有する人民解放軍ロケット軍の旅団は「戦闘即応任務」および「厳戒態勢任務」を遂行している。この任務には、ミサイル大隊を発射準備態勢にすることや、不特定の期間、待機位置に毎月交代でつくことが含まれるようだ。（略）

陸上配備プラットフォーム。（略）中国が保有するICBMは約300基である…（略）中国はさらに核部隊を増設し、移動式ICBM 部隊が保有する発射台の数を6基から12基に増やしている。（略）人民解放軍はおそらく既存の単弾頭式およびMIRV化したDF-5液体燃料式ICBMの改良を行っている。

海洋配備プラットフォーム。（略）中国の次世代SSBNである096型は、これまでの開発動向から、おそらくMIRV化したSLBMの搭載を想定している。（略）

空中配備プラットフォーム。人民解放軍空軍はH-6N爆撃機を実戦配備しており、これは中国が有する初歩的な核の三本柱における空中配備プラットフォームとなっている。（略）

今後の展開。（略）

進化する核態勢。中国の核態勢は進化を続けており、現在の核態勢は、人民解放軍の文書が「限定的抑止力」と表現するものとより合致している。これは、人民解放軍が「最小限の抑止力と最大限の抑止力の間に位置する非常に広い空間」と表現する態勢である。（略）

核備蓄の規模。（略）

極超音速兵器と部分軌道爆撃。（略）2021年7月27日、中国はICBM級の射程距離をもつ極超音速滑空体の実験を行い、4万キロを飛行した。この実験は、中国が部分軌道爆撃システムを実用化する技術力を有していることを実証したものと思われる。

低威力核兵器。（略）／ **警報即発射（LOW）。**（略）／ **新設ICBMサイロ。**（略）

出典：米国防総省HP
https://media.defense.gov/2022/Nov/29/2003122279/-1/-1/1/2022-MILITARY-AND-SECURITY-DEVELOPMENTS-INVOLVING-THE-PEOPLES-REPUBLIC-OF-CHINA.PDF
アクセス日：2023年4月4日